

「介護実習」を終えた看護学生による「人間関係論」の評価 —教科間の接続の視点から教育内容を見直すために—

關戸啓子, 安原由子

(徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部)

1. はじめに

医療従事者は、患者と良い人間関係を築くことが大切であり、特に高いコミュニケーション能力が求められる。しかし、最近の若者は一般的にコミュニケーション能力が低下しているといわれている。それは、医療従事者を目指す学生にも共通しており、コミュニケーション能力の向上を意図する授業が増えている。そのような中で、保健学科は学科共通科目として「人間関係論」を開講している。この教科は、看護教員が担当しており、将来の職業に役立つことを目的に、臨床現場を踏まえた授業内容になるよう工夫している。この授業が本当に、現場で生かされる内容になっているのか評価し、改善点を明らかにしたいと考えた。そこで、前期の「人間関係論」修了後の9月に集中で開講されている実習科目である「介護実習」を履修した学生に、「人間関係論」の授業が役立ったか評価を依頼した。また、「介護実習」においてコミュニケーションが困難だと感じた点も実習記録から明らかにして、「人間関係論」の授業内容の改善点を検討したので報告する。

2. 「人間関係論」の概要

1) 授業のねらい

人間関係の形成は、ケア及び各種専門職の連携の上で基盤となるため、医療従事者に必要な人間関係の基礎知識を修得することを目的とする。そのため、体験的に理解できるように、学生同士で役割を決めて模擬体験できる場を設定して授業を行う。

2) 開講時間と対象学生

1単位(60分の授業を15回)であり、看護学専攻は1年生、放射線技術科学専攻と検査技術科学専攻は2年生への選択科目である。

3) 授業方法

ほとんどの授業は、「前半30分講義」⇒「前半の講義に関連したロールプレイング(20分程度)」⇒「課題用紙の記入(10分程度)」⇒「課題用紙の提出」という流れである。学生は一斉にロールプレイングを実施し、そこからわかったことを「課題用紙」に書いて毎回提出する。

ロールプレイングの設定は、「親子関係」⇒「大学の友人同士」⇒「医療現場での患者・医療従事者の関係」へと、身近な人間関係から徐々に臨床での人間関係に変化させている(資料参照)。授業の成績評価は、出席・課題用紙・ペーパーテストで行っている。

3. 「人間関係論」の評価(方法と結果)

1) 方法

「人間関係論」を受講して、かつ「介護実習」も参加した看護学生の実習記録(毎日の記録)の分析とアンケート調査を実施した。2010年9月に実習した学生17人に研究協力を依頼した。学生に、研究の趣旨・協力は自由意思であること・協力の有無は成績とは無関係であること・プライバシーは守られること・研究結果は発表されることを説明した。その結果、13人の学生から協力を承諾が得られた。

2) 実習記録より

「介護実習」は高齢者が利用する福祉施設で行い、選択科目で9月に集中で実施している。施設で行う実習は3日間で、学生は実習記録として毎日実習での学びを書いて提出することになっている。そこで、この学生が提出した実習記録を分析対象とした。学生の記録の中から、コミュニケーションが困難だった点に関して書いてあるところを、1文1内容となるように取

り出した。意味内容の類似したものを集めて分類し命名した。その結果、コミュニケーションの困難点は「話しかけるきっかけが難しい」「話しが続かない」「適切な話題がわからない」「高齢者の声が聞き取りにくい」に分類できた。

3) アンケート結果より

「人間関係論」の学習内容が、「介護実習」で役立ったか質問を行った。「非言語的コミュニケーションの講義」は、「役だった」と6人、「やや役だった」と7人が回答した。「理解的な態度の取り方の講義」は、「役だった」と4人、「やや役だった」と7人、「どちらともいえない」と2人が回答した。「質問の仕方の講義」は、「役だった」と3人、「やや役だった」と9人、「どちらともいえない」と1人が回答した。「医療従事者の望ましい態度・望ましくない態度の講義」は、「役だった」と3人、「やや役だった」と7人、「どちらともいえない」と3人が回答した。

4. 考察

「介護実習」を体験した学生への調査結果に、「人間関係論」での学習が「役立たなかった」という回答はなく、実習でのコミュニケーションに生かされていることは示唆された。しかし、本授業だけでは不足で、学生は実習でコミュニケーションの困難点を多く抱えていた。そのなかには、対象者が高齢者であるという特徴が反映されたものが多かった。「人間関係論」では、身近な人間関係から臨床の人間関係という広がりや視野に入れていたが、対象者の発達段階や状況に応じたコミュニケーションについては授業内容が不足していることがわかった。

5. 今後の課題

患者の多くは高齢者であることから、医療従事者を目指す学生にとって高齢者とのコミュニケーションは重要である。

今後、「人間関係論」の授業のなかに、高齢者も含めて、対象者の特徴や対象者の状況を理解した上で、望ましいコミュニケーションのあり方が学習できるような方策を検討していきたい。

資料 ロールプレイングの抜粋

<p>【学習課題：非言語的コミュニケーションの重要性】 ロールプレイング 次に示す「応答例」を下記の条件でロールプレイする 「応答例」 子供：「アルバイトしたいんだけど」 親：「簡単にいうけれど、大変よ」 1. 1人は親、1人は子供の役割を演じる。 2. 役割演技では親は次の3パターンを続けて行う。 ①やさしい笑顔で応答する。 (子供と目線の高さを同じにする) ②無表情で応答する。 (子供と目線の高さを同じにする) ③怒ったように応答する。 (親は立ち上がって、すわっている子供に対して応答する)</p>
<p>【学習課題：理解の態度の取り方】 ロールプレイング 1. 1人は話し手、2人は聞き役を演じる。 2. 話し手は何でも良いので「最近最も楽しかったこと」をテーマに話をする。 3. 聞き役は次のように応答する。 1人は、表情を変えたり、うなずいたり、あいづちを入れたりしないで黙って聞く。 もう1人は、微笑みながら、うなずいたり、あいづちを入れたりしながら傾聴し、話が一段落ついたら、聴いた内容について簡単な感想を述べる。</p>
<p>【学習課題：意見調整に有効なコミュニケーションスタイルを知る】 ロールプレイング 1. 3人グループに配られた3色の紙の中から、各自好きな色を1枚取る。 2. その色によって、これから指定するA、B、Cさんになってロールプレイする。 3. 皆さんは同級生の仲良しグループで、夏休み一緒に旅行に行く計画中である。旅行に行く先を話し合っている。色紙によって指定された、次の何れかの役になりきって話し合いを進めなさい。 Aさん：海に行ってマリンスポーツを楽しみたい。 Bさん：山に行ってキャンプを楽しみたい。 Cさん：どちらでも構わないから、仲良く旅行したい。 4. 話をすすめていて、途中で「交代」の合図があったら、誰かに色紙を渡して役割を交代する。</p>
<p>【学習課題：有効な質問の仕方を知る】 ロールプレイング 1. 3人グループに配られた3色の「患者情報記録用紙」の中から、各自好きな色を1枚取る。 2. 1人は面接者、もう1人は面接される人になる。残った1人は観察者になる。 3. 面接は、持っている「患者情報記録用紙」の色によって指定された「質問の仕方」だけを使って行う。 4. 面接者は、昨日の過ごし方について情報収集を行い、面接で得た内容は記録する。 5. 観察者は、用いている「質問の仕方」の長所と短所を記録する。 6. 3人が指定された「質問の仕方」のみでの情報収集(面接)を終了したら、「質問の仕方」をどのように組み合わせると有効であるか話し合う。</p>
<p>【学習課題：医療従事者の望ましい態度・望ましくない態度】 ロールプレイング 1. 1人は医師役で、もう1人は患者役になる。残りの1人はその様子を観察する。 2. 決められた医師の対応ごとに、患者として返事をする。 患者「手術は受けたくないのですが」 ① 医師「そんなわけにいきませんよ。手術するしかないんですから。」 ② 医師「誰でも手術はいやなものですよ。でもどの患者さんも頑張って手術を受けて良くなっています。手術しか方法は無いんですよ。」 ③ 医師「したくなければやめても良いですよ。こちらは困りませんから。症状がひどくなって困るのはあなたですから。」 ④ 医師「できれば手術したくないと思っておられるのですね。どのようなことがご心配ですか。」</p>